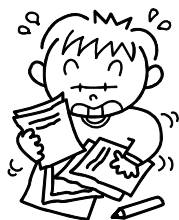


「やまぐち学習支援プログラム」活用研究協議会

誤答分析による指導の改善



4.6 - 0.21 の計算で予想される誤答は？

この問題は、H24年度の全国学力・学習状況調査の算数A¹の計算7問の中、ほとんどの学校で正答率が非常に低くなっている問題です。解説資料の解答類型では、「0.25」「2.5」「25」「4.49」「4.41」といった誤答が想定されていますが、それ以外の誤答として、右のような解答が多く見られるそうです。

$$\begin{array}{r} 4.6 \\ - 0.21 \\ \hline 0.025 \end{array}$$

小数の引き算は小学校4年生の学習内容であり、学習した時点では正しく計算していたであろう児童が、5年生で小数のかけ算を学習し、混乱していることが、この結果から予想されます。4年、5年での小数の計算の指導のポイントをもう一度振り返ってみることが大切ではないでしょうか。

「やまぐち学習支援プログラム」活用研究協議会

上に示した例は、5月18日に開催した「やまぐち学習支援プログラム」活用研究協議会において、国立教育政策研究所で小学校算数を担当しておられる磯部年晃学力調査官から御指導いただいた内容の一部です。他の問題においても同様に、児童生徒の誤答分析から指導の改善を考えてみたいものです。



磯部 年晃 学力調査官



杉本 直美 学力調査官

なお、当日は、県内の小・中学校の好取組事例の紹介をはじめ、中学校国語を担当しておられる杉本直美学力調査官からも御指導いただきました。杉本調査官からは、「考えて、判断して、表現する授業」の事例紹介や評価方法の考え方、評価に関する校内研修例など、多岐に渡り御指導いただきました。

当日参加された先生方からは、

- 全国調査の問題や解答類型による解答の分析をもとに、具体的な授業展開を考えていきたい。
- 算数科の調査問題の分析から、算数科で求められている「言語活動の充実」というものが、どういうものか理解が深まった。

など、今後の授業改善に向けての意欲的な意見を多くいただきました。

やまぐち学習支援プログラムの活用



やまぐち学習支援プログラムの活用に関しても、

- 学習支援プログラムを積極的に活用し、学力状況を客観的に把握することで、知識・技能の習得、思考力・表現力等の育成ともに成果が見られた。
- 「求められている学力」について理解を深めるために、校内研修において、学習支援プログラムの教材や問題などを活用した授業研究を積極的に行っていきたい。

といった意見がありました。

また、活用にあたっての課題として、

- 社会や理科のWeb上での掲載場所がわかりにくい。

といった声もいただいています。義務教育課としてもこれらの意見を踏まえながら、児童生徒の学力の向上に向け、学習支援プログラムが一層活用しやすいものとなるよう、改善を図っていきたくと考えています。

参加された先生方には、ぜひ、各学校や地域等で当日の話の内容を広く紹介していただきたいと思っています。また、各学校にも当日の資料をお届けしますので、こちらもぜひ、参考にいただければと思います。

「活用する力」

—理科の調査問題における4つの枠組み（視点）—

「活用する力」の育成に向けて

全国調査が始まって以来、児童生徒の「活用する力」に課題があるとよくいわれます。では、この「活用する力」を育てていくためには、具体的にどのような授業づくりを行っていけばよいのでしょうか。

理科の「活用」問題における4つの枠組み（視点）

今回、新たに実施された理科では、主として「活用」に関する問題において、次の4つの枠組み（視点）が示されています。

「適用」 **「分析」**（**「分析・解釈」**）
「構想」 **「改善」**（**「検討・改善」**）



例えば、「構想」の例としては、

「〇〇〇という目的のもと、□□□□する実験を計画することができる」といった「活用」に関する問題の枠組み（視点）が考えられます。このように、具体的な視点をもって「活用する力」を捉え、授業づくりを行っていくことにより、授業のねらいや児童生徒に身に付けさせたい力が明確になってくると思います。

この4つの枠組み（視点）の詳細は、小・中学校とも理科の調査問題の解説資料に示されています。ぜひ、ご覧いただき、理科の授業づくりはもちろんのこと、他教科における「活用する力」を考える際にも、参考にしてみてください。